

〈 書評論文 〉

インタラクションとしての近代住居空間

—ドメスティケーションの諸水準でみる「住居」—

祐成保志『〈住宅〉の歴史社会学—日常生活をめぐる啓蒙・動員・産業化』
(新曜社、2008年)

松村 淳

1. はじめに

本書は、社会学において住居／建築そのものが研究対象として取り上げられることが少ない現状において、歴史社会学という枠組みを用いつつ、正面からそれに取り組んでいる労作である。もっとも、建築家の設計する住宅を、社会学者の視点から批評するという仕事は上野千鶴子を中心として若干みることができる。上野の仕事は、建築家の山本理顕が設計した集合住宅に対して、住民による使われ方が建築家の意図したものと違うという点を指摘し、フィールドワークや住民へのインタビューの結果から得られたデータをもとに、住まうという実践と建築家による設計／計画のズレを描き出すというものである。上野はそのなかで建築家にその依拠するところの「古い」家族モデルやコミュニティモデルの更新を迫る¹。たしかにこれは社会学者ならではの重要な仕事ではあるが、言うなれば従来の社会学の「イエ」研究や「家族」研究の延長であり、積極的に空間としての住居に介入していく性質のものではない。社会学において空間に対する関心が高まっている状況において、本書はより正面から住居に切り込んだ研究業績であるといえる。

2. 本書の方法と理論枠組み

2-1. 本書の概要

本書は著者の祐成保志が東京大学に提出した博士論文『近代日本における住居空間の歴史社会的な研究』がもとになっている。祐成は東京大学人文社会系博士課程修了後、札幌学院大学を経て現在は信州大学准教授であり、専攻は文化社会学である。著者のこれまでの研究を概観すると、「モノのバ

1 そのスタイルはきわめて啓蒙的であり、また社会学者が建築の第三者的な評価機関として名乗り出てきている印象を強く受ける。

イオグラフィー・マテリアル・カルチャー研究と現代デザイン」(2004)「ことばのなかの住居—近代日本における「生活」の対象化—」(2000)「テレビ研究における民族誌的アプローチの再検討」(2006)などといった論文が確認できることからわかるように、著者の研究関心は住居以外にも、マテリアル・カルチャーやメディアといった対象へも展開されている。

著者は本書において、膨大な文献資料を渉猟しながら、住居に関する言説を収集し、それらを整理・分析したうえで記述を展開している。本書で使われている資料の多くは一次資料であり、具体的には1910年代に発刊された「住宅改良会」の機関紙『住宅』1930年代の『主婦の友』に掲載された住宅取得者の手記、あるいは幸田露伴などの作家の日記などに現れた言説である。また図面や写真といったイメージもふんだんに取り上げている。著者は、「日本の近代において、自己、あるいは他者が、どのような住み方をしているか、住居についてどのような考えを持っているか、などをテーマとする言説が初めて大量に出現するのは1910年代」(p.42)と述べる。そして住居言説のパターンは1940年代までにはほぼ出尽くしていると述べており、ゆえに、著者が参照する資料はその時代に集中している。

本書において記述分析されていく住居は、建築学における住居史によって研究が重ねられてきた物理的な「住居」とは違う。住居史における住居研究ではその形態の記述分析に重きが置かれるが、本書に登場する住居形態は極めて少数である。そのかわり、著者は住居に関する言説を参照する。そして、「重要なのは言説の内容というよりも、「言説化」という実践である。」と著者が述べるように、住宅言説の内部を精緻に分析することではなく、言説によって作り上げられていく現実＝住居がさらなる言説を生み出していく、その「交渉過程」を著者は捉えようとしている。

2-2. ドメスティケーション

ここで本書に登場するいくつかのキーワードを取り上げながら、その理論的枠組みを考えてみたい。第一章では「ドメスティケーション」という言葉をキーワードにしながら議論が展開される。ドメスティケーションという言葉は本来、野生動物を家畜化するという文脈で用いられるが、著者も好んで引用するように、シルバーストーン(1994)はこの概念を家庭用品や家電製品などを利用者が使いこなしていくプロセスを表すのに利用した。著者はドメスティケーションに三つの水準を与えて、それぞれについて事例を挙げながら記述している。三つの水準とは「マテリアル」「ミクロ」「マクロ」である。「マテリアル」な水準としては、住居が水を制御するテクノロジーを内包していく様子を描いたジャン＝ピエール＝グベールの説を紹介する。「ミクロ」な水準では、住居の中にさまざまな張り巡らされるルールが語られる。世代やジェンダーなど異なる成員を包摂する場としての住居が描かれるが、それはやがて「よい家族関係はよい住宅から生まれる」あるいは「よい住宅はよい家族関係から生まれる」という家族と住宅の相関関係へと接続される布石でもあった。三番目は「マクロ」な交渉である。ここで述べられていくのは住宅の「様式」である。「中廊下型」「居間中心型」などさまざまな住居様式が展開されていく様子である。それらは「国民国家の近代家族というイデオロギーと密接な関係をもっていた」(p.32)。という西川祐子の言説を紹介する。その具体像は、茶の間のある家に暮らすことによって人びとは「国民」となったというものである。つまり、住宅が「国民」を創出する装置とされていたと結論付ける。

2-3. 住居と住宅

著者によれば「社会学において、住居についての研究が厚みを持っているとはいえない」(p.2)。そこでは住居は背景的な扱いしか受けてこなかったもので、それを前景化することが必要であると著者は述べる。住居が「背景」とされてきた理由は、「個人(主体)／集団(組織)／地域(コミュニティ)」といった社会学において伝統的に守られてきた」(p.2) カテゴリーに収まりきらないからだ。だから本書での著者の試みは、歴史社会学という方法を用い「住居」を記述分析することで、住居を前景化することなのである。つぎに、著者の視覚を特徴づけるものとしては「住宅」と「住居」という用語の意識的な使い分けがある。

「住居＝住まい」(home/domestic space/dwelling)は、「住宅」(house)とは異なった意味の広がりを持つ」(p.3)。と述べる。著者によればそれは具体的には、住宅が建造物や宅地のように、物理的な実在として他との境界が明確に設定されているのに対して住居は、ヒトやモノが配置されている状態や、身体によって意味づけられた場のことを指している。

それゆえ、「住居」にはちょうど「身体と同じような、容易に一貫した記述を許さない性質がある」(p.3)のである。

3. 本書の特色と議論の展開

3-1. 本書の特色

本書の特色は、資料レベルでの網羅性や希少性にあるのではなく記述方法にある。それは次の三点に集約される。まず、言語生産の場と対応しながらも別々に論じられてきた言説を比較可能な形で一望できるように配置する。そして、それぞれの場の内側での言説の変遷だけでなく、相互の関連を論じる。さらに、この変動の社会的な要因や帰結について考察し、「日常生活批判」という現代的な課題につなげることを試みる (p.47)。

著者は、各章ごとにそれぞれテーマを立て、行政、社会運動家、住民、学者、作家、主婦など異なる主体の、さまざまなメディアに登場し、言説化されていった言説を並列し、それらの連関を論じ、変動の社会的な要因や帰結について考察する。

本書で参照される資料は当時の住宅専門誌や婦人雑誌など一般的なものである。「歴史学」とは違い、いかに希少な資料を使い新しい論説が展開できるかということに主眼はなく、「住居」に関して別々に論じられてきた言説を一望できるように再編するということが著者の主たる関心事である。それゆえ、『主婦の友』における読者投稿も『住宅』や『群居』などの専門誌の記事と同列に扱われているし、住宅を供給する行政サイドの言説を紹介する一方で、賀川豊彦などの住民サイドに立って活動した人間の言説も取り上げている。つまり、著者は住居をめぐる様々な主体の思惑を表象した資料を示しながら、重層的な交渉過程としての住居を立体的に描き出そうとしているのである。

こうして「住居」をえがいていくことを通して、「日常生活批判」という現代の課題に接続するのが、著者の研究のねらいなのだ。

3-2. 議論の展開

本書は第一章から終章までの全五章構成になっている。

第一章「住居の社会的把握」では歴史社会学の手法を用い、住居を研究することの意義とその方

法が語られている。上述したように、本書において第一章の役割は、本書全体の見取り図を示しつつ、建築学を含め著者が依拠している手法について詳細に紹介することである。

「必要なのは、社会学の埋もれた可能性を発掘する一方で、建築学の成果を摂取しつつ相対化するような、一筋縄ではいかない作業である」(p.2)。と述べる著者のいう建築学の成果とは、マテリアルとしての住居研究の成果である。このことは逆に言えば、従来の社会学が「イエ」や「家族」は取り扱ってきたものの、マテリアルな住居へのまなざしが無きに等しかったということである。そこで打ち出されるのが、2-2でも触れた住居の形成を「ドメスティケーションをめぐる交渉の様相」(p.10)として描き出す視点なのだ。

第二章から、第四章までは1910年代から1940年代に出現した住居言説を素材としたモノグラフとなっている。

第二章「啓蒙」では、日常生活が問題点として焦点化されていく様子が述べられる。日本の伝統的の家屋は、農家にしても都市部の町屋にしても職住一体が基本であった。しかし、明治から大正にかけて工業化が進み、それに伴い多数の人間が都市に労働者として住まうようになると、住宅は住むことに特化した場所へとその性質を変えていく。住居は直接的には職業から切り離され、一方で労働者を休息させるという重大な役割を担う場として前景化する。そして同時に、住まうこと、つまり日常生活が焦点化されていくのである。こうして日常生活が焦点化され、住宅を改良することが「良民」を生み出す最良の方法として理解されるようになる。この過程を著者はさまざまな資料を駆使して紹介する。そこに登場するのが「趣味」と「文化生活」という二つのキーワードである。まず「趣味」が生活の再構成を促進する一つの合言葉として流通しはじめ、その後、それと入れ替わるように「文化生活」という言葉が流通していくようになると著者は述べる。ここで照準されているのは中流階級であり、「高級文化の普及と低級文化の向上を図る」(p.66)ことが目的とされた。

第三章「動員」の前半では都市スラムに入って活動した賀川豊彦らの言説が紹介されるが、その中身は環境が人格に影響を与えるという意味のものであった。著者はスラムの隔離、そして浄化と続いていく都市計画を「診断」「治療」「予防」といった病理用語で捉えなおしている。やがて、「貧民」が工業化を遂げつつある都市部の貴重な労働力として認識し始められると、スラムにおける住居は「国民を創出する装置」(p.31)として位置づけられるようになっていくのである。

第四章「産業化」では、1922年に開催された「平和記念東京博覧会」に出品され人気を呼んだ催しものである「文化村」について言及されている。この展示場に出品する際の出品規定が興味深い。それは生活改善同盟会『住宅改善の方針』に沿っているのだが、その要点は「居間、客室、食堂は必ず椅子式となすこと」や間取りの「接客本位」から「家族本位」への転換、台所などの水回りの「衛生的」「経済的」改良であったという。現在でも随所にみられる住宅展示場というメディアによって、物理的な住居モデルを提示するという手法が、この博覧会を嚆矢とすることが副次的に明らかにされる。そして、その意図は「国民を創出する装置」としての住居が捉えられていた故に極めて啓蒙的であった。

4. 結論と課題

著者は最後のまとめで「日常生活を批判し、再編成するための視覚と方法は、すでに私たちが手にしている言説地図の内側から見つけだすことができる」(p.270)と述べている。本書が、「幾重にも

織り込まれたメディアの作用が作り出す、社会的な地形としての近代住居空間」(p.270)をとらえなおすことを可能にしたのは、大きな功績だ。

多くの人々が住宅について問い、答えを探し求めてきた。住宅の現状が問いなおされ、モデルハウスが作られ続けたのが近代ということもできる。これまで提出されてきたさまざまな答えの良し悪しを、何らかの基準で評価することもできよう。しかし、その前に、そもそも問いが妥当なものであったかを考える必要はないだろうか。問いこそが答えを左右する。問いが狭ければ、答えの幅まで狭まってしまう。(p. ii)

著者は本書を通して住居に対する「問いについての問い」を検証してきたのだ。したがって著者は「何らかの答え」を出すことを目的とはしていない。そうではなく、問いの幅を広げるために多くの言説資料を駆使して、それを議論の俎上に乗せることを目的とした。参照された媒体は住宅専門誌から大衆雑誌、小説に至るまでと多岐にわたり、紹介される言説は専門家の論文から主婦の投書にいたるまで、こちらも多種多様である。問いの幅を広げることによって、日常生活の問い直しへの問題提起を行うことで本書の主目的は果たされているといえよう。従来の研究では「住宅の問題」や「家族の問題」へと矮小化されてしまう傾向のある住居をめぐる諸問題を、多角的な問いを提示することによって、より大きな枠組みの中で再構成することの必要性和重要性を本書は強く訴える。

住居がときに、為政者によって人格陶冶の場として見なされ、それが「改良」されていったことや、産業化の波にのまれていく過程において住宅が「商品」として、住まい手が「消費者」として転換していくようすを言説によって明らかにしてきたことで、著者の訴えは説得力を得ている。しかし、本書は言説分析による住居の記述分析についての方法論的な限界も同時に示している。その限界とは「住民」が描かれていないという点である。たしかに本書の前半では「貧民」としての住民が、後半では産業化した住宅を「消費」する「消費者」としての住民について言及されているが、住民が住居をどう生きたか、どのようにそこを住まう実践が繰り返られていたかについての積極的な言及は見当たらない。

その理論的な対象領域は、人間と自然が織りなしてきた人類史的なスケールから、都市や国家といった社会的な機構による空間の生産、さらには近隣や家族といったミクロな身体間の関係にいたるまで、重層的に展開する「ドメスティケーション」(=住居の形成)のプロセスを含みうる。(p.3)

こう述べるように本書における著者の理論の根底には、ドメスティケーションという概念があり、これは「住居」空間の構成をダイナミックに捉えなおす視角としては格好のものであった。先に確認したように、著者はドメスティケーションにマテリアル、ミクロ、マクロの三つの水準を設定した。だが本書の中では、このうちの「マクロ」がとくに焦点化され、ミクロなレベルのドメスティケーションの実践についての記述が極めて少ないように思えるのがやや気になるところだ。また、住居言説が展開されたメディアにアクセスできた住民は、ある程度限られた数であったはずである。そこにアクセスできなかった大多数の人間は、住居形成のモチベーションを「ことば」では駆動されなかったのであり、著者の解釈枠組みと言説資料の整理の手さばきには感服するが、そこには必然的に資料の制約から来る限界がある。大多数の人々にとって、かれらの暮らす住居は何によって形成されてきたのだろうか。この問いは、評者自身の研究もふくめた本書に続く研究に課題として残されたのであ

る。

5. 「生きられた家」の歴史社会学へ

著者は、評論家の米沢慧が、子どもの成長にともない、団地の自室を改変した経験を書き記した手記を引用している。

2DK54平方メートルの家族四人の住居空間は、息子二人が幼稚園、小学校へとあがる時点ではじめて〈家族〉の身体としての自覚を生んだ。それまでまったく無自覚に仕事室兼個室としてついていた一室を子どもたちに明けわたした。学習机を持ち込む、ただそれだけで彼らの部屋はゆるぎない力を発揮した。わたしは書物の大半と仕事机を売り払い、できうる限りのものをとりのぞいた。さらにDKに面した居室の襖を外した。DKで使用した椅子テーブルを捨てた。DKの板の間に三枚のカーペットを敷きつめ隣室とあわせてひろい一室住居にした。以来、電気コタツが置かれ、移動用食卓テーブルの役をになった（米沢 1982 pp.62-63）

著者は「そこではもはや当初の間取り（供給者が設定したルール）は踏み越えられてしまう」（p.23）と著者が述べるように、ここでは住居空間が生きられた経験の中で改変されてしまっている。この事例こそが、言説空間から漏れ落ちた大多数の住民のリアルな実践についての唯一の事例であるかと思う。

これはちょうど多木浩二が「生きられた家」という概念で縮約するところの、住む者の実践と家の関係を想起させる（多木 2001）。このような事例は「リフォーム」「リノベーション」といった現場を見るまでもなく、部屋の模様替え程度の事例ですら看取できる。新しい部屋に入居し、その部屋での生活を開始して、しばらくすると家具の配置が気になり始める。そしてそれらを「じっくりくる」場所に配置しなおすということをする。あるいは壁紙やカーテンの材質や色を変えるなど、部屋が身体に馴染むまで何度でも微細な再調整は繰り返される。

たしかに、著者の記述する商品としての住居、政策のターゲットとしての住居も重要な側面ではあるが、それらはあくまで一側面に過ぎない。「住居の材質は単なるコンクリートやガラスではない。それを作り出すのは「住む」という人間の実践であり、目に見えない制度や規範である」（p.43）。と述べるならば、米沢が書き残したような言説をもう少し積極的に紹介するべきではなかったか。

もっとも、住むという行為それ自体、先に述べたメディアへのアクセシビリティの問題以前に、そもそも言説になりにくいという性質がある。いまここ、として生きられている空間を記述する時には、そのことに自覚的な第三者の視点が必要である。米沢の場合は評論家という職業柄、そのような視点を持ち合わせていたともいえる。住居や建築は当人がそこを初めて訪れた時には違和感を与え、取り壊された後にはなつかしさを残す。つまり「はじまり」と「終わり」は強く意識されるが、現在進行形の空間体験は意識化し難いのである。その空間が馴染んでくるにつれて、建物と人間との間に生じる違和感は後景化し、人間同士の相互作用が前景化してくる。ゆえに言説化された空間体験はあまり残されていない。言説や資料をもとに記述分析を展開していく歴史社会学の方法的な限界がここに立ちはだかる。この限界を乗り越えるひとつの方法として参与観察的なフィールドワークを見直すべきであろう。社会学の研究手法としてはオーソドックスではあるが、「生きられた空間」を描き出すという明確な問題意識を携えて現場に臨むことで、住民の実践を活写することが可能になると考え

る。

参考文献

- 西川祐子、2004、『住まいと家族をめぐる物語』、集英社。
上野千鶴子、2002、『家族を容れるハコ、家族を超えるハコ』、平凡社。
ライフスタイル研究会編著、2010、『住まいのりすたら』、東洋書店。
多木浩二、2001、『生きられた家』、岩波書店。
祐成保志、2000、「ことばのなかの住居—近代日本における「生活」の対象化—」、『ソシオロギス』(24)。
———、2006、「テレビ研究における民族誌的アプローチの再検討」、『社会情報』15(2)。
———、2004、「モノのバイオグラフィー・マテリアル・カルチャー研究と現代デザイン」 *Design news*.

(まつむら・じゅん 博士課程前期課程)